

フィールドの「余白」にあるもの

学術研究のフォーマットからこぼれ落ちる 「余白」的なもの

僕は近年、「暮らしのモンタージュ」というプロジェクト¹で、様々な研究者のフィールド調査の過程を映像や写真で記録している。アフリカ、アジア、日本各地など、訪れる場所は多いが、それぞれの調査地を訪れる回数は少なく、数回フィールド調査を記録したくらいでは、個々の研究者の研究内容を深く理解することは難しい。

けれども、僕が同行した多くの研究者たちのあいだでひとつだけ共有されていたことがある。それは、研究に直接関係していないとも、フィールドには豊かな出会いや出来事が溢れていて、そういった出会いや出来事における気づきや閃きの多くは論文を中心とした研究成果では殆どこぼれ落ちてしまい、共有することができない。しかし、そのこぼれ落ちるものの中には、研究を深めるための潜在的な可能性を秘めているものがあるのではないか、ということである。

もちろん、今日の映像人類学の動向などを鑑みても分かるように、すべての研究成果が「論文」



写真1. ケニアのオルカリアで水浴びから戻る農学者の田中樹さんたち

¹ 「暮らしのモンタージュ」は、一般社団法人リビング・モンタージュが主催するプロジェクトである。様々な研究者のフィールド調査の過程を映像や写真で記録し、研究者とアーティストなどの異なる文化・専門性の相互触媒的な再編を誘いながら

ら、暮らしの中で見出すことのできる「余白」を共有する「場」を創出するために、さまざまな取組みを実践している。公式ウェブサイト：<https://livingmontage.com/>

というフォーマットに集約されるものではない。しかし少なくとも、僕が同行した研究者たちは、彼ら／彼女らの学術研究のフォーマットからはこぼれ落ちてしまう「余白」的なものへの関心がある。だからこそ、まったくの門外漢であるにも関わらず、僕のような映像作家が調査に関わることができたのである。

置き換えることのできない撮影体験

研究者にとって「余白」にあるものへの関心が高まっているが、僕にとっては、そのフィールドでの「余白」＝フィールドでの撮影経験は、僕の人生の方向性を大きく左右するほどに豊かな可能性を秘めているように思われた。だから僕は、フィールドにおける学術研究のプロセスからこぼれ落ちていく何かを、むしろ中心的なものとして扱うことができるような方法はありえないだろうかと思思索し、具体的な実践へと活動の幅を広げていくことになる。

最初のケニア訪問からして既に、フィールドでの撮影経験は「余白」や「中心」といったものを超えた置き換えられない大切なものとなっている。今回は、その最初のケニア訪問での出来事を綴りたいと思う。この置き換えることのできない撮影体験を他者と共有するために、フィールドでの「余白」を中心化するための映像メディアの活用方法の探求が、ますます僕の関心の中心に存在するようになっていった。

初めてのアフリカ、ケニアのオルカリア

僕にとって最初の大きな経験は、「アフリカ」を知ったことであった。農学者の田中樹さんと初めて訪れたケニアは、滞在期間が5日間程度ととても短い撮影ではあったが、今にいたるまで何度も僕の頭の中に訪問当時の様子が思い出される。

僕がケニアを訪れたのは2016年10月であった。若い頃からアジアやアフリカなどで研究・調査を行ってきた研究者とは違って、僕は初アフリカ渡航の数年前まではアフリカを訪れる事など考えたことすらなかったが、田中さんに導かれてケニアの首都ナイロビの北西約100kmに位置するオルカリア近辺を訪問した。ケニア渡航の主な目的は、総合地球環境学研究所(地球研)のプロジェクト「砂漠化をめぐる風と人と土」²の活動を映像で記録することであった。



写真2. 田中さんとマサイのジェレミーさん

オルカリアでは最初に、同地で調査を行っていた文化人類学者のベノワ・アザールさん、日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターの溝口大助さんら数名の研究者たちとマサイの集落を訪問した。

地の人々とともに、暮らしの安定や生計の向上につながり、同時に環境保全や砂漠化抑制が可能となるようなアプローチを探っていた。その基本的な発想は、砂漠化に対処するためには、「ヒト VS 自然」ではなく「ヒトも自然も」という発想の転換にある。

真っ赤な布を身体に巻き付けた集落の家長であるジェレミー・サイタバウ・タニンさんは、昔ながらの牧畜をしつつ、農業や観光にまつわる仕事も生業としていた(写真2)。

都市部で暮らすマサイが観光客相手に商売するという構図は、テレビやネットで見ることができるが、ここはジェレミーさんの集落以外、360度見渡す限り遮るものもない大平原である。僕が直接聞いた限りだと、実際は「観光」という単語を使ってはいなかったのだが、ジェレミーさんは、僕が彼の集落を訪れた際に、ヨーロッパから訪れた友人を案内しなければならないと忙しそうにしていた。ヨーロッパからこんな僻地に観光気分で人が訪れる時代になっていたことに大変驚かされたのを思い出す(写真3)。

牛糞でできた家屋とスマートフォン

ジェレミーさんの集落では、周囲に遮るものがないので、夜になると広大な宇宙を感じる丸い星空に包まれることになった。僕の感動が筆舌に尽くしがたかったことは想像に難くないと思うが、このとき満天の星空の下、ジェレミーさんの息子と雑談する機会があった。ジェレミーさんの民族衣装とは対照的に、彼はジーンズにTシャツといった洋服を来ており、手にしていた最新のスマートフォンでいくつか写真を見せてくれた。

光に包まれた暗闇の中で、牛糞で建てられた家屋を前にスマートフォン(スマホ)の画面をスワイプする彼のこなれた指先を目の当たりにしたとき、その指先の動きが僕の常識を軽々と逸する出来事のように感じられて、僕は苦笑しながら「綺麗な写真だね」などと答えるしか仕様がなかった。



写真3. ジェレミーさんの集落

滝澤龍彦(1928-1987)の小説『高丘親王航海記』(1987)の中で、天竺を目指す高丘親王(799-865?)が旅の道中で大蟻食いに出会う場面がある。ここで滝澤は、高丘親王と同行していた儒良に「大蟻食い」という生きものは、いまから約600年後、コロンブス船が行きついた新大陸とやらで初めて発見されるべきものです。そんな生きものが、どうして現在ここにいるのですか。」と語らせている。スマートフォンは、近代化の進んだ都会で使用されるべきものである。電気も通わぬ牛糞の家屋に暮らす青年が、どうして最新のスマートフォンを流暢に操っているのか。僕の心境は、まさに儒良と同じであった。

インスタ映えしそうな成人儀礼の聖地

このときマサイの青年が最新のスマホで見せて

くれたのは、成人儀礼のための聖地の写真であった。まんまるに広がる満点の星空の下での最新のスマホというコントラストが記憶に強く残っていることは先に述べた通りだが、青年が見せてくれた聖地の写真が僕の複雑な驚きを増幅させていた。その理由は、同じ日の日中に、まさにその聖地を目指して田中さんらと一緒に出かけていたからである。

ジェレミーさんの案内でサバンナの平野をしばらく歩いて行くと、火山でできた巨大なクレーターが目の前に広がった。クレーターの真ん中の島の部分がどうやら目的地のようだった。その目的地に至る道と言えるようなものではなく、岩石のあいだを縫うようにクレーターの溝の底部分まで下ることになった。しかしながら、片道2時間半程



写真4. 成人儀礼の聖地を目指す一行

で目的の聖地に到着するだろうというジェレミーさんの言葉とは裏腹に、4時間たってもまだ片道の半分も進まない(写真4)。

殆どロッククライミング状態の中、僕は重い撮影機材を抱えて、ジェレミーさんらにどうにかくっついて撮影を試みていた。しかし情けないことではあるが、研究者の皆さんには余裕費鑠と目的地へと歩みを進めていたのに、僕がリタイア第一号となってしまったのである。仕方がなく、ジェレミーさんに機材バックを背負ってもらい、撮影もままならぬままヨロヨロと途中で引き返すことになった。

最短ルートで戻るために、ジェレミーさんは刀を振り下ろしながら枝を刈り、道を切り開きながら引き返す。その頼もしい背中を朧気に追いかがら、己の体力不足を心の底から反省したことが思い出される。

ちょっと判断を間違えば、水も食料もなく、一晩クレーターの溝の底で過ごすことにもなりかねないような過酷な道程を、マサイの青年は、まるで近所の観光地に散歩に出かけるかのように訪れ、インスタ映えしそうな写真をスマホで撮影して暮らしを彩っているのだ。満点の星空の下での僕のアナクロニスティックな感動が、なんとも形容しがたい複雑な驚きを伴っていたことは、想像に難くないだろう。

自分の外側のフレームを壊す サバンナの水浴び

汗だくになり息を切らしながら、どうにかジェレミーさんの集落まで戻ることができたのだが、彼の集落には電気も下水道も整備されていなかっ

た。ゆえに、風呂もなかった。ケニアでは数日間風呂に入っていたので、水浴びをするため、水場まで歩いて行くことになった(写真1)。

何もないサバンナの平原を30分か40分程は歩いただろうか。ようやく水場に到着したが、そこは元々、地熱による水蒸気が湧き上がっていた場所であった。オルカリアには、いくつもの火口からなる火山体があるため、このエリア近辺にはたくさんの水蒸気の噴出口があり、その水場はそのひとつであった。ジェレミーさんたちは、噴出口に金属パイプを差し込み、水蒸気を冷やして水を作っていた。その水を飲み水や水浴びなどの生活用水として利用しているのである(写真5)。

ただ「水浴びする」というだけで、こんなにもその「水浴びする」という行為に至るプロセスが都会的な暮らしと異なるものなのかな。「暑い日差しを浴びながら、サバンナを30分近く歩く」ことと、ただ「水浴びする」ということが、意味の上ではどう考えても結びつかない。しかしながら、自分の常識的な感覚だと目的のために必要な手段がどこかで捻れて引き伸ばされているような状況が、

実際に目の前で当たり前に展開されているのを見ると、自分自身を形作っている外側のフレームみたいなものまでが壊されるようで、とてもワクワクしたものである。

澤崎 賢一(さわざき けんいち)



写真5. 水場のジェレミーさん